

平成16年度 農林水産部試験研究 中間評価結果

番号	機関名	課題名	研究期間	研究概要	進捗状況	評価結果	委員コメント
1	農総研	山菜・山野草の栽培化技術と特産品の開発	H14～18	能登に自生する山菜・山野草の栽培化技術を開発し、新たな特産品として供給する。	アサツキ、シュンランの優良系統の選抜、収穫や開花の前進化技術を確立した。今後、ギョウジャニンニク、山ウドの促成栽培を検討する。	B	山菜等の地域資源を人の手をいれて保護していくことは重要であるが、資源の保全という視点も併せた検討が必要ではないか。また、能登ブランドとして販路拡大を図るにはコスト試算やマーケティング調査をしっかりと考えてもらいたい。
2	農総研	農産加工試験研究 大吟醸酒用酒米の品質評価法の確立	H14～17	大吟醸酒用の酒米として評価が極めて高い「山田錦」を基準とした酒米の科学的評価法を確立し、大吟醸酒用酒米系統の効率的な選抜に役立てる。	蒸し米の物性(軟らかさ)は25%の米飯圧縮により評価できることを明らかにした。今後、酒米に含まれる米タンパク質、香り成分の評価法の開発を行う。	B	今後、研究を進めるに当たっては、日本酒の今後のニーズを把握し、それを生産販売していく酒造組合、酒造メーカーとの連携を更に密接にする必要がある。
3	農総研	野菜栽培におけるエコ農法支援のための土壌管理技術の確立	H14～17	県内主要野菜について、収量・品質を確保しながら、化学肥料削減のための土壌管理技術(施肥技術)を確立する。	肥効調節型肥料を用いた、基肥全量施肥+条施肥の組み合わせによる化学肥料20%以上の削減技術を確立した。今後、有機質肥料を含めた施肥体系を検討する。	B	減農薬・化学肥料栽培や有機栽培は、生産者だけでなく消費者ニーズを踏まえ、取り組むべき課題であるが、行政施策と連携し、ターゲットを明確化する必要があるのではないかと。研究を実施するに当たっては、単に減化学肥料だけでなく、低コストで使いやすい商品開発やその他環境に配慮した技術開発にも視野を広げて欲しい。
4	畜総	体細胞クローン牛の生産技術確立試験	H10～19	体細胞クローン牛の生産技術は、遺伝的に同一な牛を多数生産・確保する技術で、優良種畜の増殖や家畜の改良を通じ、生産性の向上や品質の向上等の効果が期待できる。そこで、クローン作成技術として、核移植技術、クローン胚の選定方法及び保存方法について検討する。	平成15年度までは流死産、生後直死、病死等を繰り返したが、クローン作成技術の改善により、平成16年度、6頭のクローン子牛の出産に成功し順調に育っている。	B	この研究成果は、県民のクローン技術に対する意識、食品安全委員会の意見等を踏まえた実用可能性や他県での取組状況、成果を考慮する必要があるが、実験動物の大量生産への応用などベンチャー企業育成の面から有用であり、そのような観点から開発した技術の知財化等も視野において取り組むべきではないか。
5	水総	アカガいの増殖効率化調査	H14～17	七尾湾のアカガイ資源の増殖を図るため、種苗放流事業を行っているが、近年、夏場に斃死することが多い。そのため斃死要因を明らかにし、増殖手法を改善する。	アカガイの斃死要因について水質・底質の環境分析、海底泥の有無による比較飼育などを実施し、斃死に海底泥の環境が関わっていることが想定された。	B	アカガイ等の漁業資源の継続漁獲が可能となるように研究成果を期待するが、海の環境については海と森の関係など広角的な見知からの検証が必要と考える。また研究内容については、数値目標や目標達成へのアプローチを明確化を検討していただきたい。

評価結果区分 A：優先的に継続、B：継続が適当、C：計画変更して継続、D：継続の必要性が低い(中止)

機関名 農総研：農業総合研究センター、畜総：畜産総合センター、林試：林業試験場、水総：水産総合センター